
コナン & 灰原 + 湊

曖華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナン&灰原+湊

【Nコード】

N8317D

【作者名】

曖華

【あらすじ】

灰原の従姉妹と出会い、その後だんだんと組織につながり・・・

第1話 転入生

もう、春か・・・

あ、やばっ！！そういえば春休みの課題があつたな！

やり忘れてた・・・

のんきで休服をとっていた西の探偵、服部平次。

服部はなんでもできると思ってる人もいるだろうが服部は実は勉強面ではあまり出来なくって誰かに頼ってばかりなのである。

「はあ・・・この問題とけへんな・・・あ、そうや！工藤にきくしかないなあ」

プルルルルル プルルルルル 「はい」

「あ、工藤かあ？俺やけどちょっと時間もらうな」

「いきなりなんだよ・・・」

「春休みの課題でこの問題が解けへんのや」

「ああ？お前・・・わざわざ俺に聞くなよ。てか、そんなに自分だけでやれよ。」

「おねがいやからー!!このとおり!」

工藤^{コナン}はしぶしぶと問題を聞き答えをだした

「ほな、さんきゅ!」

”がちゃ”

「はぁ・・・なんだったのか・・・」

春、4月もすぎ登校日となった――

「「コナンくん!!」」

下からおさない少女の声が聞こえてきた。窓をあけてみる　そこにいたのは

「あ、歩美ちゃん?!」

「あ、ってなによ!一緒にいこーっ!!」

、と無理やりコナンの手をつかんで一緒にいくはめになった。

(はぁ・・・俺はいつまでこんなことしてなきゃいけないのか・・・)

心の中でため息をつくコナンだった

学校につくと妙に教室の中が騒がしい

「なんかあったのかな？」

歩美ちゃんが疑問に思っていると教室の中から元太、光彦の声がし、こっちに向かってきた

「お、おはようございます！」

「あ、光彦　なんか教室が騒がしいけどなにかあったのか？」

横はいりするように元太が言った

「なんかな、今日転入生がくるみたいだぞ！」

「え、本当っ？！女の子？男の子？」

歩美が興奮気味にきく

「女の子みたいです！しかも可愛いみたいですよ！」

「ほんとっ？！みてみたいなあ〜」

歩美たちが会話してるなかでコナンは一人静かに教室の中へ向かった
コナンが一人していると後ろから突然肩をたたかれた

「んっ?!」

「おはよう・・・なんか妙に教室が騒がしいわね・・・」

「あ、灰原か・・・なんか転入生がくるらしいよ」

「あ、そうなの」

灰原はいつものように静かに歩いていった

（はは・・・本当に可愛げないな。あいつ）

コナンは今日2回目のため息をついた。

ため息をつくときと幸せがにげるというけど・・・本当に今逃げてるかもな・・・

先生が教室にはいつてきた。転入生をつれて・・・

「今日は転入生を紹介します」

「え、と・・・仲野湊みなとといいます。よろしく願いします」

すごく可愛くって、ハーフなのか、少し外国まじりの顔立ちだった。

「可愛い子でしたねー！」

「あ、そうだ！湊ちゃんも一緒にかえろっ！」

「そうだな！」

あの例（少年探偵団）の三人はわくわく気分だった

「ねえねえ！湊ちゃん！一緒にかえろっ！」

「あ、う、うん・・・」

そしていつもの5人と湊で帰った

これから襲い来ることなど知らずに・・・・・・・・

第1話 転入生（後書き）

おかしい文章かもしれませんが、中傷無しで見ただけだと光栄です。

第2話 偶然

転校生である湊はコナンと灰原とたまたま家が近かったので歩美達3人と別れて一緒に帰った。

すると湊は突然へんなことを言い出した、そう・・・あの時と同様・・・

「ねえねえ・・・貴方って・・・もしかして・・・」

「ん？いきなりどうしたの？」

「工藤新一と・・・宮野志保・・・」

「え・・・」

突然妙な事を言い出したのである

「ちよつとまって・・・貴方もしかして・・・」

灰原が言い出すと湊はゆっくり口を動かせた

「そう・・・私のコードネームはコルトン・・・」

「えっ?!」

コナンは頭の回転が少し遅くなった・・・それは、だって・・・黒の組織の仲間である奴がもう一人増えたのだから・・・

そこで灰原が口を開いた。

「貴方、たしか私と同じ薬を開発してたわよね？」

「ええ・・・」

「江戸川君、この子は私と一緒に働いてたコルトン本名・・・・・・・・」

本名を言おうとしたときに湊に先にいわれた

「宮野由梨、よ」

「はっ?!なに?」

「そう・・・この子は私の従姉妹なの。」

「い、従姉妹・・・?!お前・・・」

コナンは興奮気味だった。何しろ灰原の従姉妹がいて、しかもそいつも黒の組織の毒薬を開発してたなんて・・・想像も出来なかった

由「まあ、私も一応解毒剤をつくるのを手伝うから・・・」

コナンは啞然としてた

「あ、貴方のことならとづくに調べてあるから。大丈夫よ」

その日はコナンと湊は博士に状況を説明して泊まることになった

コーヒーを片手にコナンは喋りだした

「ちょっと、まってくれ。お前は一体・・・最初っから説明してくれ」

「ええ・・・いいわよ」

コナンと灰原と湊は3人で話を始めた

第2話 偶然（後書き）

変なストーリーかも知れませんがどうぞあたたかい目でみてくださ
い。

第3話 誘拐

「まあ、簡単に説明していくと、湊は私の従姉妹と一緒に毒薬をつくってたつてことよ。」

「・・・まあ、大体のことは把握できた。湊はどうするんだ？」

「私は・・・」

湊が言おうとした瞬間に博士が先にいった・・・

「湊くんはわしの家にとまりなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え、ええ・・・・最初っからそうするつもりだったわよ」

湊は躪いたようにいった

翌日――

コナンは博士の家に泊まっていたので灰原と湊と三人で学校へ向かった

「あ、今日また話し合えないか？」

「え、ええ・・・いいわよ・・・」

灰原がいうと湊は、「同感」

放課後――

「ちょっと俺一回おっちゃん家に戻ってからいくから、先に博士の家に帰っててくれ！」

「はいはい・・・」

ここからコナンも予期せぬことが起きるのだ

・・・？「あ、あいつじゃないか？！あのよく新聞に載ってる」

・・・？「あ、そうだな！あのお方の命令なんだし・・・つれていくか！」

・・・？「そうだな」

コナンは殺気を感じ後ろを振り返ったが、誰もいなかった。前に向いた瞬間コナンはある男等にクロロホルムを吸わされた

「う・・・これは・・・ク・・・」

言おうとした瞬間意識をうしなった

・・・？「結構簡単に捕らえましたね！」

・・・？「そうだな」

・・・？「じゃああのお方の所へもっていきますか！」

男等はコナンを車に乗せある工場へと運んだ

工場へとつきコナンを無理やり起こさせた

「う・・・ここ、は・・・？」

「ここは・・・工場だ」

「おじさんたち、僕になんの用がある・・・の？」

「俺たちはただはこべと命令されて誘拐しただけだ。」

「じゃあ僕はどこへ・・・？」

コナンが言った瞬間あるお方・・・そう、覆面をつけた人影がでてきた

「お前・・・が工藤新一か。」

（んっ？！何で俺の名前を・・・）

「お前は、一体・・・？」

「本名は伏せとく、今言ったらおしまいだからな。おい！お前等こいつを縛ってあそこの部屋にぶち込んどけ！」

・・・？・・・？「はい！！！」

第3話 誘拐（後書き）

最後変な終わり方ですけど気にしないでください><

第4話 監禁

コナンはある部屋へ監禁されてしまった

数時間後――

「いて・・・ここは・・・？あ、そうか・・・俺たしか・・・」

コナンは頭を回転させて前の記憶に戻った

「まあ、ここから脱出する方法かんがえねーとな。あ、確かズボンのポケットにイヤリング型の携帯電話が入ってたはず・・・」

コナンは自分のポケットをあさってみるが、やはり無かった

「はは、あるわけないか」

だが、そのときに眼鏡が無いのに気づいた

「あ、？！俺の・・・？！何処に・・・？」

・・・？「ようやく起きたのか。お前の探しているものならここに
な・・・」

そう言って男はコナンの犯人追跡眼鏡をだした

「!？」

渡すのかと思いきやその眼鏡を割って、粉々にしてしまったのだ

「何してるんだよ!」

「ふふふ・・・これには発信機がついてるし、ここに誰かがきたら厄介だからな」

(ちっ・・・)

「まあ、これからお前をボス(あの方)のところにつれていくからな・・・。早くでろ!」

男はそういう扉をあけ無理やりコナンを引きずりだした

あの方のところ――

・・・? 「つれてきましたぜ」

「ごくろうだったな」

「いえ」

「おい! 工藤新一! お前、コルトンを知ってるだろう!」

「?!」 (ちよつと待てよ・・・こいつ等は組織の仲間であの方、とは組織のボス・・・、と同じ人物ってことか?!)

「お前！話を聞いているのか！！本名、宮野由梨・・・」

「ああ・・・知ってるさ・・・まさか、お前等が組織の仲間であり、そこに居るあの方といわれているのが、黒の組織のボスだなんて想像もしてなかったけどな」

「そいつの居場所を教える！」

「はっ、教えてどうするんだよ」

「組織を裏切った罰としてコルトンを殺害し、そして、そいつの従姉妹でもある、シェリーも・・・、」

「何?!」

「そういうことだろう？探偵君・・・コルトンがいるということはその近く・・・いや、もしくは一緒にシェリーもいるはずだ」

「・・・?!」

「早く、居場所をおしえろ！」

「は？お前なんかに教えるわけ無いだろう」

コナンがそういうとボスはいきなり拳銃をとりだしコナン目掛けて発砲した。

「うつ・・・」

その銃弾はコナンの肩にあたりそこから出血してきた

「あの部屋へ閉じ込めとけ！」

「はい！」

コナンは肩から出血したまま部屋へと投げられた。そして、激痛でコナンは意識を失ってしまった。

第4話 監禁（後書き）

評価よろしくお願いします

第5話 謎

数時間後、コナンは目を覚ました

「いて・・・もう止血してるみたいだな」

止血しているみたいだが、まだ肩が痛いと思鳴を上げてるようだ

・・・？「・・・起きたか、さあお前もそろそろ教える気になったか？」

「はあ？俺はいつになってもおしえねーよ。俺は・・・だって・・・」

（あいつと約束したしな・・・、絶対にお前を守ってやるって・・・）

・・・？「お前そんなことしていると知らないぞ?!」

「はあ？なにがだよ」

・・・？「・・・、お前またあの方のところにいくが、ちゃんと言えよな・・・自白しろ！シェリーとコルトンの居場所を!!」

そのころ博士の家では――

灰原「博士！工藤君が来ないのよ！彼の身に何かあったのかしら・・・

・？」

湊「なんか・・・、嫌な感じがするわね、新一君・・・」

「新一！？また事件に遭遇でもしたのか・・・？」

「博士！工藤君の犯人追跡眼鏡の予備持ってるでしょう？それで工藤君の居場所突き止められないかしら？」

「よし・・・！やってみるんじゃない！」

そんなこと・・・無駄に決まってる、だって粉々にされたんだから・・・。

「ダメじゃ！センサーが感知してないんじゃない！」

「えっ？！工藤君・・・」

「次はどうしたらいいのかしら？」

「誰か、新一君のことをよく知ってる人っていないの？」

「・・・あ、そういえばFBIの人に相談してみるわね」

数十分後――

ばたっ

なにかが外れるような音がした

「えっ？何？」

続いて聞こえる息切れ・・・

「・・・」

「おくれてごめんね！哀ちゃん！」

「ジョディー先生・・・、先生ドア壊した？」

「え、あ、ごめんなさい！急いで来たから壊しちゃった」

「まったく・・・」

「んで、江戸川君が誘拐されたって本当？！」

「まだわかんないけど・・・多分・・・」

「すぐにしらべるから！」

そのころコナンのほうでは――

・・・？「工藤新一をつれてきました！」

「ご苦労。さて・・・話してもらおうか？シェリーとコルトンの居場所を・・・。」

「はあ？おしえるわけねーだろう？！てめーに教える義務なんて無

いんだよ!」

「・・・、君はいつまでそうしてられるかな?」

そういうとあの方は拳銃をコナンにむけた

「・・・。殺したいんだったら殺せばいいじゃないか・・・。でもあいつ等には手をだすな!」

少し、時間をおいて男は言った

「ふふふ・・・。すぐに殺すのはつまらない。だが、私がお前に居場所を聞き出してお前が要らなくなつて殺したとしても、私はシェリー達を探すがな」

「てめえー!組織をうらぎつたからなんなんだよ?!わざわざ殺すことないだろう?」

「ははは・・・。君は。」

男はそういうコナンに拳銃をむけ発砲させた

「お前もよくわかっていないな・・・。」

その弾丸はコナンの腕にあたつた

「く・・・。」

だが、少し位置がズレたためそこまで出血しなかった

（組織は一体・・・それにボス（あの方）とは誰なんだ？！覆面を
してたら誰だかわかんないし声色も変えてる・・・一体誰なんだよ
？！）

第5話 謎（後書き）

遅くなってしまい、すみませんでした＞＜

また変な終わり方を・・・どうか許してください＞＜
すみせん＞＜

読んで感想、意見、評価していただけたらとても光栄です！
・
・

第6話 侵入

「ふふふ．．．まあ、そろそろ君も．．．分かるだろう．．．これを使えば」

そういつて男は小さな箱から注射をだした

「お前?! 何をするんだ?!」

「ははは……おとなしくしている。お前だっ
たらきつと役に立つだろうしな」

「はあ?! やめろ!」

抵抗するコナンを押さえつけコナンの首に針をさした

「く……お、おまえ……」

コナンは氣を失った。その側で不氣味に笑っている……

[illegible]

そのころ灰原たちは――

「居場所が判明したわ！」

「えっ？！」

「公戸丁。× 工場よ!」

目暮「では、今からそこへむかえ!」

部下「はい!」

コナンたちは――

数時間後――

「う・・・なんだ・・・?!体が・・・うごかねー」

その瞬間

「うわあああああああ!!!!!!!!!」

灰原たちは――

「ついたわね!それじゃあ計画通りに!」

ジョディー先生の指示に従って部下達がいつせいに自分の場所へと走った

その計画とは・・・

1・まず自分のポジションにつく

2・組織の奴等が出てきたら拳銃をむけて発砲する

3・コナン君の居場所を突き止めたら確保！

→簡単すぎるしおかしいですよネ><すみません！っと・・・作者から（）（）

そう計画していたが、その計画はまったく意味のないものになってしまっうなんて・・・誰もそう思っていないかった

無線「m」 「こちらA班ただいま黒の組織の部下と思われる奴等を倒しました！」

ジヨデイ「了解！」

「こちらB班ただいまコナン君を確保しようとしてるんですけど・・・」

「何?!どうしたの?!」

「コナン君の様子がおかしいんです!」

「どういうこと?!」

「それは・・・うわあ!?!?!」

「何?!?!一体どうなっているの?!?」

「ははは・・・どうもFBIの諸君。私がボスだ」

さっき無線で連絡していた仲間とは別の、低い声がきこえてきた

「コナン君・・・だったかな？その子はもう私たちの仲間だ」

「え・・・?!」

第6話 侵入（後書き）

（誰かさん）一体・・・コナンはどうなってしまったのか？！

（曖華）さあ？？どうなっちゃうんだろっね？！

（誰かさん）おしろよ！教えないと・・・

（曖華）ヒイイイ！！！！（。□ノ）ノ

第7話 真実

「え？」

「ははははは…！私はさつき、ここの坊やに毒薬を体にいれてね…。
その薬は、組織の一員になる便利な毒薬なんだ…。」

「え？！何言ってるのよ！！」

「別に…。どこもかしくも間違ってるないさ…。」

「そんな薬、誰が作ったのよ？！」

「ははは。そりゃそこに居るお嬢ちゃん達に聞いたほうがいいと思うがな…！」

一瞬にして、灰原と湊の表情が曇った

湊 灰原（え？！何いってんのよ…。そんなこと言ったら私達が昔、なにしてたか…分かつちゃうじゃない！？）

「え、ちょ、ちょっとまって！お嬢ちゃん達ってまさか…?!」

「そつだ…。そこに居るのは、コードネームシェリー…。そしてコルトンだ…!!」

「えっ?!?!?!う、嘘よね・・・?」

「う…」

灰原と湊は、ジョディの言葉に困った…。これを言ってしまうとすべてを話さなきゃいけないし、コナンの正体もいずればれてしまうとおもったからだ。

「まあ、その話はいい。とにかくこの坊やは私達の組織にとって、重要な子だ。使えるしな・・・!!」

「ちょっとまちなさいよ!」

ジョディ先生が言った時にはもうすでに無線はきれていた

「どうしたらいいの・・・」

「そ、そうね……。一体・・・なにがあつたのかしら…?」

目暮「仕方ない。もしかしたら電話がかかってくるかもしれん。そのときに備えて逆探知機を用意しとく。」

「…了解」

灰原（工藤君…もしかして…あれを…）

いきなりジョディが灰原と湊に質問してきた。

「ねえねえ……。」

「なにかしら？」

「貴方達…。さっきアイツが言ってたことどういう意味？！」

「う……………」

（どうしたら…………でもここで言うしかないのよね…………きつと。工藤君ごめんなさいね。私…………）

「ねえ？！一体？！」

「その…毒薬とは私達が作ったのよ。」

「え？！ちよつと…？！」

「驚かないで聞いて。私達は……………」

灰原は、過去のことをすべてFBIと警察に話した。そしてその毒薬のこと……

「それで、あの毒薬は無理矢理、組織の仲間…一員にさせる薬なのよ。」

「じ、じゃあコナン君はもしかしてその薬で…？」

「ええ…多分…。」

「まあ、無理矢理って言っても、もうそれを飲んだら無理矢理じゃ、

なくなっちゃうんだけどね。」

「でも…ここで驚いてなんか居られないわね！コナン君をなんとかしてでも取り戻さなきゃ！」

「わ、私達は解毒剤を作ってみるわ。そっちのほうはよろしくね。頼んだわよ。」

「り…了解！！」

そして、灰原たちは解毒剤を、FBIと警察達はコナンを取り戻すための作戦を……

第7話 真実（後書き）

とうとう・・・話してしまいました!!（´・ω・｀；A）
けれども、まだコナンの正体は言っていないです><
それを言うのは・・・A

第8話 犯行

コナンは――

「う……」

数時間気を失っていたため少し目眩がした

「ようやく起きたか……」

「え……僕は……?! 一体」

「ははは。君はパイカル……名前はパイカルだ」

「パイカル……??」

コナンは記憶喪失にかかっていた

「君にはこれから私の下（部下）として働いてもらう」

「う……」

「その前に紹介しとこう。でてきなさい」

ドアを開ける音がしたと同時にジン ウオツカが入ってきた

「紹介する。パイカルだ」

「こ、こいつは…?」

「見覚えがあるか? まあ、大丈夫だ。この子はれっきとした私達の一員だからな。仲良くしてやってくれよ」

「は、はい…。」

ジンたちは部屋をでていった

「それにしてもあれは、確か…」

「ああ…工藤新一。だな」

「なぜ仲間…?!」

「多分俺の推理だとあいつは前にシェリーとコルトンが作った毒薬を飲んだ。その毒薬には組織の一員にならせる薬が入っている。」

「へえ…。兄貴。どうします? あのパイカルというコードネームの工藤新一を」

「まあ、面白いことになりそうじゃないか。あいつだったら使えるさ」

「そうですね」

「僕は何をしたらいいの?」

「ははは。君はとても頭が冴えるそうじゃないか」

「??」

「まあ、最初はいいつを騙して金を奪って来い！」

ボスはそういつて写真を見せた

「うん…いいけどいくら？」

「まあ、1000万円って所だな」

「分かった！じゃあ行って来るね！」

コナンは自分が今何を犯しているのか…自分が悪いことをしているという罪悪感を感じなくなっていた。そう。あの毒薬の効果で…

（1000万円か…でも、写真をみせられたのはいいけど、どこに居るんだ?!）

コナンがそう思ってる時に急に腕についてた時計が鳴った

「ん?!」

ノイズが聞こえる…

「ああ。私だ。男の居場所を言うのを忘れていたな。男の居場所
は。通りにある。×マンションの504号室だ」

「了解！」

時計には発信機がつけられていて高性能な携帯電話みたいになっている

コナンはそのマンションへと歩き1時間ぐらいでついた

「ここか…。えと…504、504つと…あった!」

504号室

ピンポン ピンポン

「はい」

「こんにちわ!」

「なんだこのガキ…?」

「下北健司さんだよね?」

「そうだけど…?」

「驚かないできてね? 健司さんのお母さん…。さっき交通事故にあっただ。」

「はあ?! 何言ってるんだよ?!」

「本当だよ。ほら、これが証拠」

コナンは一枚の写真を見せた

「この人、健司さんのお母さんだよな？」

「ん?!」

コナンが見せた写真は交通事故にあったお母さんの写真だった

「これが、証拠。わかった？」

「ちょ、ちょっとまってくれよ！俺は母親の交通事故のことなんてきいてないぞ?!」

「あたりまえだよ。だってさっきあったばかりだもん。」

「何?!それに、お前はなんなんだ?!何しに来たんだ?!」

「あ、僕はそれを伝えに来たのとそのお金をもらいにきたんだ。金額は1000万円」

「は、払えばいいんだな？」

気が動揺していたのか、何も疑問に思わず男は1000万円をこのあと銀行に振り込む契約をしてしまった

「ありがとうございます！」

男は家を飛び出し母のいる病院へと向かった。コナンがさっき病院の名前をいったのだがそんな病院はないし、実際に事故も起こっていない。これは詐欺という犯罪をコナンは犯してしまった。だがそんなのは気にせずボスに報告へいった。

「ご苦労。成功したかね？」

「成功したよ！」

そして月日がたち――

第9話 人物…？

月日がたち――

灰原たちは――

「解毒剤が完成したわよ！」

警察はあれから電話を1カ月ほど待っていたが来なかったので別の作戦をたてていた

ジヨデイ「ほんと？！よし！私達も作戦を考えたし！それに、居場所もつきとめることができたわ！」

目暮「それでは、江戸川コナン君を助けにいくぞ！」

部下「はい！！」

？？「ちょっとまってください！」

「ん？！」

全員が後ろを振り返った。なんとそこに居たのは…

コナンたちは――

「今日は、君に殺人してもらおうと思う…。」

「誰を??」

「ふふふ…それはな…」

「…??」

「まあ、いい。あとで話す」

「?? 了解ー!!」

だが、その人物こそコナンにとって…嫌、工藤新一にとって大切な人物。

誰もが、こんな悲惨なことになるとはおもってもいなかった。

数時間後――

コナンは工場で待機していた。そう、ボスと一緒に……

そして、FBI、警察も到着した

決戦の始まりだ…

「コナン君!？」

「…? 僕…コナンって名前じゃないよ?」

「え?!」

「ははは。ようこそ。FBI、警察の諸君。この子は記憶喪失にかかっているんだ。過去のことを話しても無駄だと思うがな」

「何?!コナン君?!...だよね?」

ジョディが聞くがまったく覚えてない様子だ

「ねえねえ?この人たちを殺すの?」

「ああ。そうだ」

「りょうかい!」

コナンの屈託のない笑顔にやられてる場合では無かった。もうすでに拳銃を構えていた

「江戸川君!やめて!!」

灰原が言った。工藤君といいそうになったが言わなかった。ううん。違う。言えなかったんだ...

「う...」

コナンは一瞬頭痛がした。記憶を取り戻そうとしているのか.....

「とにかく誰でもいい。まず適当にそこら辺に居る奴を殺せ!」

コナンはこのかけ声と、ともに発砲した

「
…」

たまたま、ターゲットになっていた人物にはあたらなく済んだ

ボス「ちっ…」

どこからか声がした・・・そう、あの懐かしい声が…

「コナン君！？」

「ん…?!」

その声の主は…

第9話 人物…？（後書き）

さて・・・一体誰なのでしょう？！

当てないでくださいーい！（笑

でわでわ・・・ゝゝゝ。。。ゝゝゝ（（（（（・ε・）逃走【笑

第10話 約束

その懐かしい声の主とは…………

目暮「蘭くん！今、君が飛び出してもコナン君には…」

蘭は聞く耳も持たずにコナンの方へ走っていった

「な、なに！？オイ、あいつを撃て！」

灰原「江戸川君！！やめて！絶対にそれだけは…！！」

「く…」（一体どうしたらいいんだ？何がどうなっているかまったくわからねー！）

「早く！」

「やめて！」

コナンはこっちに向かって走り出す蘭になにか懐かしい目で見えた。それと同時に思考能力があやふやになってきた

「いいから！あの女を撃つんだ！」

「う、うん…」

しかし、コナンは発砲してしまった…。蘭に向かって…

その場が瞬間にして静かになった――

「蘭さん！！蘭さん！！しっかりして！」

蘭は腹部を撃たれ重傷だった。そして、その瞬間にコナンの記憶がすべて回復した。

「え…俺…一体…?!」

コナンが見た光景は総勢としているFBIと警察、そして腹部を撃たれて血まみれの蘭の姿だった

「ら、蘭？！もしかして…」

コナンの手には拳銃が握られていた。そして、すべてを読み取った

「俺が…蘭を…?!俺が…?!」

蘭は救急車で運ばれていった。命が助かるかどうかはまだ分からない…

ボス「ちっ…なぜ?!何故お前の記憶が戻ったんだ?!」

灰原「それは…」

湊「きつと蘭さんを思う気持ちの隅にあったのよ。そして、蘭さんを撃った瞬間、すべての気持ちが張り裂けて同時に記憶を取り

戻したのよ…。」

ボス「何故だ?! そんなものはないはずだ! あれは完全な毒薬だったはず!」

灰原 湊「あの薬は完全なものではない…」

2人は同時に言った。

ボス「なに?!」

灰原「私達は完全な薬を作っていたわけじゃない。APTX4869だって… あれは、パイカルというお酒を飲めば一時的にでも体は元の姿に戻る。元の姿に戻るってことは、薬が完全じゃないわけ。解毒剤でもなかったしね…。」

ボス「何を言ってる!? もう、いい。こいつ等を殺せ!!」

ボスはコナンに命令をした。記憶は回復しているものの、まだ完全に心は回復していなかった。記憶は回復しているものの、まだ完全な時に違い…

「そ、それは… でき、うわあああああ!!」

コナンは操られているかのように拳銃を握りなおし灰原たちの方へ向けた

「は、灰原… 湊… に、にげ、ろ…」

だが、灰原と湊はその場をどかなかった

「灰原！湊…早くにげる！」

「嫌…だって、私達のせいでこうなったんだから。ここから逃げるわけにはいかないのよ…！」

「は、はやく…」

脱力したかのように拳銃を発砲した。だが、コナンは灰原たちの方へ発砲したのではない…
自分へ…

ばた…

音と同時にコナンが倒れた

…

「江戸川君…！！！！！」

いつせいにコナンの方へ向かった。

ジョディ「すぐに救急車の手配を！」

部下「はい！」

血まみれになりながらもまだ意識はあった

コナン「灰原…俺、お前と約束したよな…絶対に守ってやるって…
そ、それに湊だって…」

灰原と湊は一筋の涙を流した

「江戸川君…」

これ以上言葉がなかった

第10話 約束（後書き）

今回も2話更新させていただきました><
読んでくださりありがとうございます！

そろそろクライマックスになってきます><

あ、今日から4月までは更新が出来ないかもしれません；
ちよつと部活や、何やらで…

すみません；！でも、4月に入ったら更新しますので是非これから
も見てください！

第11話 感動……？

コナンは病院へと搬送された

その後FBIと警察で黒の組織を撲滅させて…

もう何が起きているのかわからなくなっていたボスを倒すのは簡単だった。自分を取り乱していたから…。人間というのは世の中で一番怖く、一番感情を抱きやすい生き物なのだ。だから、自分が思っていたとおりにいかない心と心が汚されて自分自信も汚される…一番簡単な生き物で、そして一番複雑な生き物なのである。

一カ月後――

コナンは今まで昏睡状態にかかっていたがようやく今日、抜け出した。

コナンの周りにはたくさんの方が居た

「つつ…み、みんな…」

灰原「おかえりなさい」

愛想のない言い方だったかがコナンはその気持ちをしっかりと受け取った

「コナン君…本当に無事でよかった。」

蘭はそういいながら涙を流した

「もう！無理しないで！これから！」

湊は怒ったようにいったけれど内心うれしかった。

皆が皆、コナンを心配してくれていたのであるから……

その1ヵ月後にコナンは退院した。もうすっかり元気であった。

そして、灰原と湊はある1つの解毒剤を完成させた……………

もう完璧なものだった。灰原と湊が心を込めて真剣なまなざしで…

前に言った完璧ではない薬を作ってその性で色々な人に迷惑をかけたしまったことや、その薬を利用して犯罪目的で使ってしまう…そんな未完成な薬ではない。100%完璧なもの…

その薬とは……………

第11話 感動……？（後書き）

4月より1日前に更新させていただきました！
そして次が最終回です！（´。ゝ´）

第12話 秘密

その解毒剤とは…

数日後コナンは博士の家へと行った

「よー！」

「あ、新一君！久し振りじゃのー」

「ははは。」

そんな話をしていると灰原と湊がコナンのもとへやってきた

「工藤君、私、あなたが入院中にA P T X 4 8 6 9の解毒剤作つたの。」

「え？！」

「これは100%成功するわよ」

コナンはいきなりそんな事をいわれたので驚きを隠せなかった

「はい」

そういつて渡された。

「あ……ありがとな！灰原と湊はどうするんだよ？」

「私達の間もちゃんとあるから、心配しないで。」

「そっか！分かった。」

コナンはその場で解毒剤を飲んだ。

「う……うわああああ！！！」

声をあげてその場に倒れこんだ

「し、新一君大丈夫なんじやろうか？」

灰「ええ……大丈夫……多分。」

湊「絶対に大丈夫だから。心配しないで！」

博士がコナンをソファーに移動させた

数時間後――

「う……お、俺……」

コナンは自分の状況を確認した。

大成功だった。コナンは工藤新一へと戻っていた

灰「大成功ね」

「あ、ああ！」

湊「どうしたの？そんなに…」

「いや・・・もう驚きをかくせねーな」

2人はクスツと笑った。

「お前らは・・・？」

「私達はまだもどらないかな？」

「なんでだよ」

「「秘密」」

（はぁー本当にかわいくねーな）

新一は小さなため息をついた

「なによ？」

「なんでもないですー！」

「まったく」

「とにかく、ありがとな！お前等も早く戻れよ！」

「はいはい。」

第12話 秘密（後書き）

今まで読んでいただきありがとうございます！
この後は読者様方の想像をお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8317d/>

コナン＆灰原＋湊

2010年10月9日12時54分発行